

サッカーのゴール裏応援団における「居場所」の考察 —FC 町田ゼルビアを例として

スポーツ文化研究領域

5016A015-2 海江田 保雄

研究指導教員：トンプソン リー A. 教授

【序章】

本研究の目的は、日本サッカーの「市民クラブ」におけるゴール裏応援団（ウルTRAS）の組織特性について、「居場所」というキーワードを軸に考察し、小規模な応援の場が持つ社会的意味の一端を明らかにすることである。

本研究における「居場所」とは、「他者に必要とされる社会関係とそれに伴う肯定的な自己の位置づけ」と定義する。また「市民クラブ」とは単一の親企業や大口スポンサーを持たず、小口で複数のスポンサーとサポーターのボランティアで成り立つクラブを指す。本研究では市民クラブにおけるウルTRASを、2000年代中盤に勃興した大衆文化における小規模な応援の場の一例として位置づける。その上でかれらが応援によって得られるという「居場所」が、応援活動の中でどのように形成されるのか考察する。

これまで文化社会学におけるファン研究ではファン同士の特徴的な社会関係に焦点が当たってきたものの、ファン同士が作り出すヒエラルキー（Hierarchy）に関する議論は不足していた。またサッカーのサポーターに関する研究ではサポーター同士の社会関係に関する考察は盛んになされたものの、その分析範囲は応援活動の場のみに限られ、サポーター同士の日常的な関係については十分に触れられてこなかった。またそこでの社会関係はごく一時的な繋がりとしてのみ捉えられ、そのために個人化社会に適応しうるとされてきた。しかしながらクラブ運営にサポーターの多大な協力を必

要とし、観客動員も比較的小規模である市民クラブにおいてもサポーター同士の関係は一時的であり得るのか、さらにはサポーター集団における社会関係とヒエラルキーとの関連はどのようなものであるのか明らかにされていなかった。

これらを踏まえ、本研究では社会関係の性質と応援活動を通じたヒエラルキーの形成という視点から、「居場所」がどのように形成されるのか考察する。

筆者は2017年2月から2018年11月までJ2リーグに所属する「FC 町田ゼルビア」のウルTRASにフィールドワークを行ってきた。町田ゼルビアは町田市の少年選抜チームを起源としており、多数の市内企業によるスポンサードとサポーターのボランティアで成り立ってきたクラブであることから、本研究の対象として適当である。

【第1章】

第1章では町田ゼルビアのウルTRASにおける、集団内外の社会関係について考察する。試合応援におけるサポーターと選手、そしてウルTRASとそれ以外のサポーターとの関係は、お互いをよく知らなくとも応援活動が成り立つため、繋がりはごく緩やかである。一方でウルTRAS内部はゴール裏における振る舞いを通じた信頼関係をベースとする、より対面的で親密な関係を構築している。とりわけ町田ゼルビアはサポーター同士の生活圏が近接していることもあり、お互いの日常生活をある程度呈示し合った付き合いがウルTRASの中で見られる。ただしその関係は一部グループにおけ

る 40 代～50 代の女性メンバーを主な担い手としており、20 代後半～30 代前半の男性を主とする別のグループではより流動的な社会関係を構築している。またグループや性別・世代を問わず、他者に対する依存を排し、お互いが自由に応援活動を楽しめるよう配慮する規範意識が存在する。

【第 2 章】

第 2 章では町田ゼルビアのウルTRASにおいて何がファン資本 (fan capitals) [Hills 2002] と見なされ、ヒエラルキーを生み出しているのか考察する。ヒルズのいうファン資本はファンの文化資本とファンの社会資本に大別され、ファン・コミュニティにおけるヒエラルキーは、ファン自身が所持するファン資本の影響を受けるとされる。町田ゼルビアのウルTRASでは応援活動における主体性や信頼感に加え、スポーツ応援に関する知識と運用の技術も重要な文化資本となっている。そして他チームのウルTRASやクラブフロントとの社会関係が、町田ゼルビアのウルTRASにおける社会資本となっている。それらはかれら自身を「正しいサポーター」として位置づけ、ヒエラルキーの形成に影響を与えている。

【第 3 章】

町田ゼルビアのウルTRASでは個人の独立を基盤とした社会関係を築き上げており、それによってお互いの自由な応援活動が保証されている。しかし個人の立場を安定させる制度や人間関係が希薄である場合、それにとって代わるのはファン資本の多寡、そしてそれを基にした周囲からの評価を高める行動のみである。第 3 章では年代や社会的属性の異なる 2 つのグループにおいて、

それぞれのグループにおける社会関係の差異が、評価される振る舞いの差異に関わり、そしてそれが「居場所」の安定性にも影響していることを指摘する。

【結章】

先行研究におけるウルTRASはスタジアムでの一時的な繋がりしか持たない集団として扱われ、日常生活における関係はほとんど触れられてこなかった。一方町田ゼルビアの場合はごく限定された範囲ではあるものの、日常生活でも密接に関わる社会関係が、メンバーにおける「居場所」の維持に貢献するセーフティネットとなっていることが確認された。こうした社会関係は自由で流動的な集団の中であって、相対的な安全を保証してくれるものである。このようにファン集団における社会関係は、ファン自身の日常的な動態も踏まえた視点から把握されるべきであり、ファンが活動から得られる「居場所」もそことの関係によってより立体的に把握できる。

本研究ではサッカーの市民クラブのみ対象に調査したため、クラブの規模や他の大衆文化と「居場所」の感覚との関係については更なる比較考察が必要である。またサポーターが日常生活との関係においてどのように「居場所」を位置づけているのか、サポーター自身の日常生活における実資本が応援活動における資本とどのように関わっているのか十分に考察することができなかった。これらの点も今後の研究課題としたい。

《文献》

Hills, M. (2002) *Fan Cultures*, Routledge.